

研究課題

全校生徒・教職員の協働で取り組む、学習成果の蓄積・共有とその活用

副題 ～一方向の伝達から双方向の共有へ、全員で課題解決に取り組む学習への転換を図るために～

学校名	琴浦町立赤碕中学校
所在地	〒689-2501 鳥取県東伯郡琴浦町赤碕1922-1
学級数	10
児童・生徒数	206名
職員数/会員数	25名
学校長	音田 薫
研究代表者	松本 昭範
ホームページアドレス	http://www.torikyo.ed.jp/akasaki-j/



1. はじめに

本校は、鳥取県中部に位置し、農業・漁業を主な産業とする地域を校区としている。

生徒数は 206 名、学級数 10 学級（内特別支援学級 3 学級）で、県内では中規模程度の学校である。生徒は素直で学習や部活動に熱心に取り組む、保護者の方も学校の活動を積極的に支援してくださっている。

2. 研究の目的

新しい学習指導要領においても、生徒が自ら思考・判断し、表現する力を育むことがその大きな柱となっており、本校においても、従来から生徒が考え表現する活動に力を入れて共通実践に取り組もうとしてきた。

ところが、生徒の「学習成果」の「表現」は、ノートや板書、せいぜい B4 判のレポート等の形式のため、データの蓄積や学級での「共有」・「活用」が困難であった。板書でまとめた事項は次時には消され、ていねいにまとめたノートやレポートも「共有」するには小さすぎ、「共有」するため模造紙にまとめる作業は時間ばかり要して、日々の学習に取り入れることは不可能に近いものであった。結果として、前時の学習を想起できずに確認を繰り返したり、生徒の学びや気づきという「学習成果」が学級内で「共有」されずに、教師からの一方通行で学習が終始しがちであった。

「学習成果」を「共有」しあう機会がないため、生徒がノートにどのようにそれぞれの「学習成果」を構成しているか教師が確かめる場面も少なくなりがちで、教師が、授業、特

に板書の改善点について、もっと生徒個々の学びから情報を得るべきではないかとの声も、職員の中から聞かれるようになってきた。

これまで、本校では、パソコンやプロジェクト等を用いて学習を進め、例えば数学科の作図やグラフ作成、理科の図表提示やシミュレーションなどを、生徒がパソコンを用いて行い、その結果を蓄積する取組を進めてきた。そこでは、生徒のまなざしが一つになり、伝え合おうとする態度の高まりが見られる成果も見え始めている。今年度、メディアボードも町からの予算措置により購入でき、いっそう取組も活発化してきている。

そこで、全校生徒・教職員の「協働」により、生徒の「学習成果」であるノートやレポート、板書やパソコン上の表示などを、デジカメやスキャナ等で保存・蓄積し、大判プリンタで出力して『学級の学習成果』として「共有」・「活用」することを通して、生徒一人ひとりのノートやレポートに構成された一人ひとりの「学習成果」を教師がしっかりとみつめ、友だち同士で参考にしあったり、前時の学習を基礎として次時の学習に取り組んだりできる学習への転換を目指そうと考え、本研究課題を設定した。

3. 研究の方法

全校生徒・教職員の協働により、全教科、全領域で以下の活動に取り組むこととした。

- ① 「全職員で、楽しみながら 1 単元ずつ取り組もう」を合言葉に、それぞれの担当教科における 1 単元の学習において、

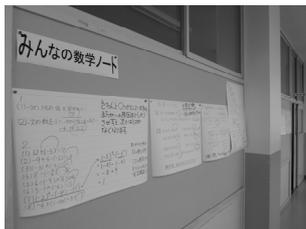
- ・板書のデジカメでの保存、プロジェクタで提示したパソコン上の操作や表示などの保存を行う
 - ・生徒のノート、レポートのきめ細かな評価と、優れたノート、レポートのスキャナによる保存を行う
 - ・それらを、大判プリンタで『学級の学習成果』として出力し、次時学習や、相互の「共有」に供する
- ② 各学級担任は、道徳や学級活動の学習活動において、年1回程度、
- ・板書の記録、班や学級での話し合いのまとめをデジカメやA4判程度の用紙に記録し、保存する
 - ・それらを大判プリンタで『話し合いのまとめ』として出力し、次の発表や問題提起に供する
- ③ 総合的な学習の時間では、各学年で取り組む人権問題に関する調査活動、職場体験や社会人インタビューなどのまとめについて、
- ・生徒のまとめやレポートをスキャナで保存する
 - ・それらをレイアウトして大判プリンタで出力し、学級・学年・全校での課題共有に供する
 - ・テーマごとの系統性・発展性への気づきに活かす

これらの取り組みを通して、「一方向の伝達から双方向の共有へ、全員で課題解決に取り組む学習への転換」を図ろうと試みた。

4. 研究の内容

各教科・領域において実践してきた研究内容の一例を以下に示す。

- ・国語科・・・文法（動詞や形容詞などの活用）の学習において、各班で調べた語尾の変化を拡大印刷して提示し、学級で確認しあう活動、また、拡大印刷した活用形の表に調べた事項を記入していく学習活動
- ・社会科・・・日本の諸地域（特に北方領土）についての学習において、事前調査として、北方領土と思う地域をマークし、それを拡大印刷して示しながら、生徒たちの把握の様子を共有しあい、学習のきっかけとした。本校社会科教員が、本年度、北方領土の現地視察研修に参加できたことから、北方領土の排他的経済水域や水産資源など様々な事項を拡大印刷してまとめ、確認しあう学習活動に広がりを持つ
- ・数学科・・・○課題学習で、単利と複利の金利計算を行い、10年間の元利合



《写真1》「みんなの数学ノート」コーナー



《写真2》ノートを参考にしあう姿が...

計を表とグラフに表して拡大印刷し、単利と複利のグラフの概形や、金利の高低による単利と複利の違い大きさの変化について気づいたことを発表しあう学習活動

- 生徒のノートや練習問題集の解答を拡大印刷して、廊下に、「みんなの数学ノート」コーナーとして提示し、他の生徒のノートづくりや練習問題の解答の仕方や間違えた問題の直しかなどを参考にできるようにした
- ・理科・・・天気図と天気の変化を時系列で拡大印刷して並べて提示し、時間の推移によりどのように等圧線が変化し、それに伴って天気や風向き、気温などが変わるか確認しあう学習活動。特に琴浦町では、年末年始の豪雪で30時間以上にわたって車が幹線国道で立ち往生する状況だったので、豪雪をもたらす原因となった天気図についての生徒の関心も高いものになった
- ・英語科・・・3年間の学習のまとめとして、友だちや先生、学校生活の思い出を短い英作文にまとめて、廊下に拡大印刷して掲示し、相互に行うメッセージ交換を全員で一覧できるようにする学習活動
- ・家庭分野・・・マンガ「サザエさん」の磯野家の間取りを参考にして、住居の機能性や考慮すべき点を考察する学習活動を通して、自分が良いと思う間取りを考え、作品としてまとめる学習活動。また、まとめた作品をそれぞれ拡大印刷して、発表しあう学習活動
- ・学級活動・・・学級の中にある様々な課題や、身の周りにある偏見や差別の問題について、その原因となる心の動きなどを考え、「差別の根っこ」として班で意見をまとめ、拡大印刷して発表する。それぞれの班の発表を聞いて、さらに学級で討議し、自分たちの学級の問題を自分たちで解決しようとする学習活動
- ・総合的な学習の時間・・・○1年生の社会人インタビュー、2年生の職場体験学習で、インタビューから学んだこと、実際の職業体験を通して学んだことをそれぞれレポートにまとめる。それらをスキャナで取り込み、拡大印刷して廊下に掲示し、それぞれのレポートを相互に参考にしあう学習活動
 - 本校に以前勤務し、現在、青年海外協力隊員としてアフリカ（タンザニア）で活躍している先生を通じて、現地の生徒たちと写真・手紙などで交流し、その様子を拡大印刷して掲示して交流の深まりを確かめ合う学習活動



《写真3》磯野家の間取りを参考に



《写真4》住宅プランも参考にして

5. 研究の成果と今後の課題

これまで本校では、全職員で、毎時間の授業に「めあて」を持って始めることや、まとめの段階で、その「めあて」が達成できたか確認することの大切さ、そして、それを具体化する板書の工夫やノート評価・指導について研究を重ねてきた。

一部の教科では、パソコンを活用して、生徒の学習成果を保存し、それを次時に利用するなどの取組も行ってきたが、全校的にそのような実践を積み上げたり、その記録を蓄積したりすることはなかなか進まず、広がりも十分にもてないまま、掛け声倒れに終わることも多かった。

今回の研究を通して、少しずつではあるが、毎時間、授業の「めあて」を確認し、その達成を確かめることが可能になってきていると実感できつつある。

教師にとっては、学習の最初に本時の「めあて」を確認することで、板書計画や目標とする生徒のノートづくりも意識しやすくなってきた。生徒にとっては、自分の学習成果であるノートやレポートが拡大印刷され、教室や廊下に掲示されたり、次の学習の題材となっていくことで、ノートのとり方がいねいになったり、よりわかりやすいまとめ方を意識するきっかけとなってきた。

これらのことを通して、生徒が自ら思考・判断し、表現する力を育むという新しい学習指導要領の目標に近づきつつあると考えている。

これまで、本校では、印刷はA3判が最大の大きさと、生徒の学習成果の「共有」は不可能に近いものであった。ところが、A0判拡大印刷機が気軽に使えることで、生徒のノートやレポート、作図のすべてが次の学習の素材となることに多くの先生方の目が向き、次々と活用の場面が広がってきている。

A3判では教材にならなかったものが、A0判で印刷すると学級全員で共有できる教材になることが明らかになってきた。

「これまで教材にはならないと思っていた、食品の成分表示欄を、A0判で拡大印刷すると、いろんなことがわかるので、生徒たちに様々な食品の成分表示欄を持ってこさせる学習が可能になり、深まりが生まれた。」「生徒のノートをどんどん廊下に掲示するので、ノート点検をするときに、『このノートは他の生徒の参考になるなあ』ということ意識しながら点検するように自分の意識が変わってきた。」などの声は、今回の研究を通して私たち教員の意識が変わったのではないかと考える。

また、「間違えた問題を、消しゴムで消さないで、赤ペンや青ペンで色を工夫しながら直している人のノートを見ると、間違いは自分にとって大切な学習の材料になることが分かった。」「同じ人にインタビューしたのに、感じ方がいろいろ違うことに気が付いて、やっぱり、みんなの感想まで見ることができてよかった。」などの声は、生徒たちに、今回の研究を通して「学び」の「共有」が進みつつあることの表れと考えている。

6. おわりに

今回の研究を通して、「全校生徒・教職員の協働で取り組む、学習成果の蓄積・共有とその活用」が、わずかながらあるが確実に前に進みつつあると感じている。まだまだ、教科による差や、生徒一人ひとりの意識の違いなど課題も多いが、教員も生徒も新しい学習の可能性と、その成果について実感しつつあると感じている。気軽に「学習素材」や「学習成果」を「蓄積」でき、費用をあまり気にせず拡大印刷して、教員や生徒で「共有」できる環境は、確実に本校に広がってきている。

翌年度以降もこの環境を大切にして、一層全校生徒・教職員での「協働」を進めて、さらなる生徒・教職員の意識の変容を目指して取り組みをたゆみなく進めていきたいと考えている。